北アルプス前穂高屏風岩中央カンテ（インゼルルート）の登攀

日時:1961 年 3 月 29 日～3 月 30 日

メンバー:CL 高田直樹、林　修

概要:既に中央カンテは 1947 年夏の岩稜会による無雪期の初登以来相当数のパーティが無雪期、積雪期ともに登攀しているが、この事が我々の屏風に対する魅力をいささかも減ずるものではなかった。そこで我々は春の北尾根合宿の後を利用してこのルートの積雪期登攀を試みたのである。

記録

3月 29 日

横尾小屋（5:30）−取付点（7 :00）−B10 上部（11:00）−インゼルクモノ木でビバーク

明るくなった横尾の小屋を今日撤収する皆に送られて出発する。横尾の河原から屏風のプロフィールを眺めながら未知なるものに抱く色んな思いが胸にあふれ、自然と無口に足早に進んでいった。河原のトレールを伝って三ノガリーの少し手前まで行き、それより昨日取付点を偵察に行った際に見つけたトレールに上りタンネの林の中を進む。

少しリッジ状になった所をタンネとカンバに導かれて、取付の露岩の下に着く。左手には中央壁が我々を威圧するようにそそり立っている。ここから屏風はその傾斜を急激に増していく。

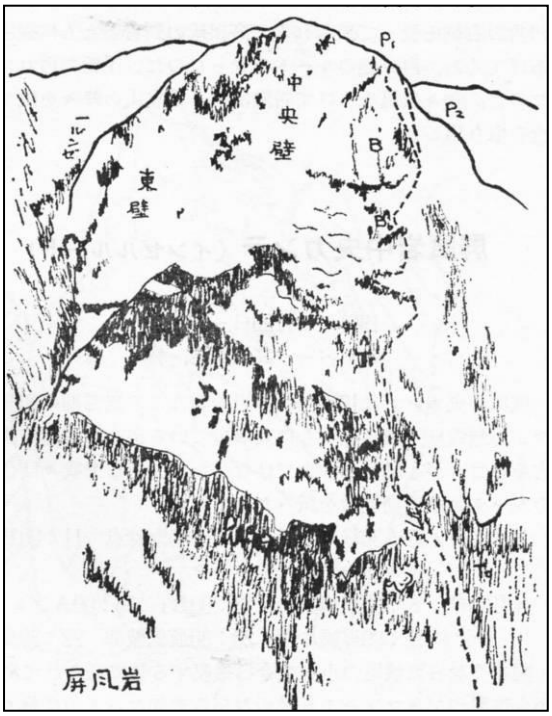
ここで我々は小休止を取りザイルでお互いを結びつける。この露岩を左に廻り込むように登り出し、中央カンテの登攀を開始した。露岩の上部より B10 の大ブッシュが始まる。B10 は遠くから眺めるとヒマラヤ襞のできた相当急な雪壁に見えたが、来てみると大きな潅木の生えたところで、雪の状態も良く、潅木に跨ってビレイをしながら快調に高度を稼いでいった。

しかし、所々に小さなブッシュが密生している所では垂直のヤブコギを強いられ、時にはブッシュにアブミをかけて登るようなこともしなければならず、大きなザックのセカンドは悪戦苦闘である。

このような所をブッシュを頼りに直登を続け、B10 ブッシュ帯の上部バンドを少し左へトラバースしブッシュに跨ってゆっくり昼食をとる。この少し前より横尾の河原を豆粒のような人間が歩いているのが見え、コールをかけてくる。多分今日撤収する皆が我々の様子や如何にと励ましに来てくれたのであろう。

ここより右手カンテの方へ少しトラバースをする。Eフェースの下である。今迄の雪とブッシュに垂直の岩壁が加わり、いよいよ屏風の中央部へ来たなとの感を深める。最大限にブッシュを利用してB7ブッシュ帯に入る。B7ブッシュ帯を左手へ斜めに登り、垂直の壁の下の小さな草付を伝って左へトラバースする。

今にもはげ落ちそうな草付からアブミに乗ってホッと一息ついてアブミを見れば、その下に横尾の河原があった。この岩壁を乗越した所から小さなブッシュが密に生えて上に続いている。インゼルである。



中央カンテ登攀ルート

インゼルの中の少し凹角になったところをブッシュだけをつかんで左上部へと登ると小さなテラスに出た。すぐ横に二本の太い桧がならんで生えている。

我々は最初、できるだけ早く登攀を完了するには、少なくともAフェース下まで行けば良いビバークサイトが得られると思っていたが、ミトンをはめての木登りで手がだいぶ弱っており、この調子とこの時間とではとてもそこまで行けそうにない為、この木と岩壁の間でビバークをすることにする。

根の上に雪がつまって踏み固めると丁度二人がビバークできる程の広さになった。風は朝から相当強く吹いていた。西風でカンテに当ってうなりを上げていたが我々は常にカンテの左側を登っていたのでさして苦にならなかった。ビバーク地点に着いた頃より雪がちらつき出してきた。しかし、あまりひどくは降らず、時々東の空には淡い月が顔を出し、小雪の横尾谷を照しているのが足の下に眺められた。

足下の雪を取ってエッセンを作り腹がふくれると睡魔がおそってきた。

3月 30 日

登攀開始 8 :30-B1(13:00)- A フェース下(15:00) P1(17:30)-屏風の頭(18:30)-最低鞍部(20:30)-横尾小屋帰着(22 : 30)

あたりが明るくなってきた。時々ツェルトから顔を出すが小雪がパラついている。ゆっくり朝食を摂る。もう少し暖かくなるのを待つ。8時頃より雪も止み薄陽がさしてきたので用意をして登り始める。

右横のテラスにもどり、テラスの上のオーバーハングをアブミ3ケを使って吊り上げ、ブッシュをつかんで乗越し、そのブッシュに乗る。

足場は垂直の岩壁と直角に生えているブッシュだけしかなく、止むを得ずそこでビレイする。このピッチはわずか 15m程であるが相当の腕力を要する。

ここでセカンドの林が途中まで来て手が効かなくなり、一旦降りてここで初めてザックを吊り上げた。ここより右手のカンテへ小さな草付を伝いアブミ 1ケを使ってトラバースし、またブッシュに乗ってビレイする。

このブッシュに乗ってのビレイは体が完全に空中にあるため相当の高度感がある。

これを直登して B1 に入り太い木の幹に跨って休息する。このあたりはまさに垂直の森林といった感じで、直径 20～30cm程の木が沢山ある。

さらに1ピッチ木登りをして大きな木の生えた地帯を抜け出し、眼前にAフェースが姿を現わす。

少し傾斜のおちた雪壁を1ピッチでAフェース下に至る。Aフェースをアブミ不足に悩みながらそのオーバーハングを登りきり、小さなブッシュでビレイする。

ここで再びザックを吊り上げる。ここから左手へトラバースしてブッシュ帯に入り、それを1ピッチで抜け出して雪稜に出、その雪稜を伝ってP1 に至り中央カンテの登攀を終了する。しかし、P1 からもまだ細い雪稜が続いている為、コンテで進んだ。

屏風の頭から屏風の耳あたりで日が沈み、東の空には大きな月が我々を照らしていた。青白く光る雪景色の中を唯茫然としてポックリポックリと最低鞍部より涸沢横尾谷を経て、今登って来たはずの屏風をぼんやりと眺めながら横尾の小屋へ帰った。

(記/林　修)

屏風岩全景